

# 日本英文学会 北海道支部 第 66 回大会プログラム

日時：令和 3 年 11 月 7 日（日）

形式：ウェブカンファレンス

※ Zoom の URL など開催の詳細につきましては、10 月の下旬までには下記の北海道支部ウェブサイトにて、また支部会員の皆様にはメールにてご連絡させていただく予定です。

北海道支部ウェブサイト：<http://www.elsj.org/hokkaido/index.html>

開会式および支部賞授賞式 (10:00~10:15)

支部賞受賞記念講演 (10:20~11:20)

司会 北海道大学 瀬名波 栄潤

カズオ・イシグロ『日の名残り』(1989)とその映画化(1993)

法政大学 丹 治 愛

〈語学部門〉

セミナー (11:25~12:25)

司会 北海道大学 野 村 益 寛

日本語と英語の語の意味拡張のメカニズム

札幌大学 濱 田 英 人

昼休み・理事会 (12:30~13:20)

〈文学部門〉

研究発表 (13:25~14:35)

司会 北海道科学大学 板 倉 宏 予

1. (13:25~14:00)

Are We There, Yet?: A Bisexual Tribute to Adrienne Rich's Continuum

北海道大学大学院 Ozge Canbul

2. (14:00~14:35)

老いへのまなざし—Adrienne RichとAge Studies

北海道大学大学院 白 井 那 奈

シンポジウム (14:45~17:15)

アメリカ文学と病

司会・講師	札幌市立大学	松 井 美 穂
講師	北海道医療大学	鎌 田 禎 子
講師	東京大学	藤 井 光

〈語学部門〉

研究発表 (13:25~14:35)

司会 札幌学院大学 眞田 敬介

1. (13:25~14:00)

使用依拠的第二言語習得における個人の言語発達プロセスの考察

ーメタ言語としての母語の果たす機能に着目して

北海道大学大学院 泉 瞳

2. (14:00~14:35)

Unaccusative verbs with two arguments in Mandarin Chinese

北海道大学大学院 高 叶琳

シンポジウム (14:45~17:15)

不定語研究の展開と展望

司会	北海道大学	奥 聡
講師	明治学院大学	平 岩 健
講師	お茶の水女子大学	中 西 公 子
講師	東京大学	渡 辺 明
講師	神戸大学	澤 田 治

<発表要旨>

<北海道支部賞受賞記念講演>

カズオ・イシグロ『日の名残り』(1989)とその映画化(1993)

丹治 愛(法政大学)

『日の名残り』の映画化について、ジャブヴァーラの脚本の前にハロルド・ピンターの脚本があることが知られていた。ジャブヴァーラの脚本には、ピンターの脚本に由来するところもあり、1993年に公開された映画のクレジットに彼の名前を入れることも提案されたが、ピンターが謝絶したということもどこかで読んだ気がする。わたしはピンターの脚本による『フランス軍中尉の女』の映画が好きだったこともあって、彼の『日の名残り』の脚本をずっと読みたいと思っていたが、ようやく数日前に手にいれることができた。そして一読して率直に感動した。原作に感じていた語りの不自然さ(たとえば怒られるか)もそぎ落とされ、1993年の映画にあるスティーヴンズのキャラクターに加えられたと思われる変更もどこにも見当たらない。この脚本での映画化を見てみたい!その脚本があたえてくれた読後感を北海道支部の方々と共有したいと思う。

<文学部門:研究発表>

Are We There, Yet?: A Bisexual Tribute to Adrienne Rich's Continuum

Ozge Canbul(北海道大学大学院)

The need for a *bisexual continuum* and a bisexual reading of the feminist scholarship, is self-evident. Such a feat is not feasible without proper tribute to the Continuum, coined by Adrienne Rich in “Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence.” Hence, the present paper will argue the possible bisexual connotations and coexistence of bisexuality alongside lesbian existence within Rich's prose.

This essay is constructed of three parts: the definition of the major terms surrounding the sexuality discourse and contemporary bisexuality and the limitations of these terms; Deleuze's theory of bisexuality; possible bisexual dialectics created by taking his approach further; and critical reading of three essays written by Rich, to explore their bisexual potential and the gradual change of ideas concerning intersectionality.

## 老いへのまなざし—Adrienne Rich と Age Studies

白井 那奈(北海道大学大学院)

Adrienne Rich は、人間が生きる限り避けられない「老い」を詩に描く。1985 年全米女性学会でエイジズム（高齢者差別）が指摘されるまで、フェミニズム運動において加齢は重要な課題ではなかった。Rich 研究においても老いは主要なテーマではなく先行研究も少なかったが、Sylvia Henneberg らが Rich 作品を老いの観点から解釈する可能性を見出し、注目され始めている。本発表では、老いは身体的な変化であると同時に社会的に構築される一種の概念だと考える age studies の枠組みを用いて、Rich 作品における老いを議論したい。人文学分野やフェミニズム運動で老いへ注目が集まる時代に、そして同時に Rich 自身が 60 歳代へと向かう 1970-80 年代頃の作品 “Merced,” “Contradictions: Tracking Poems,” “Negotiations”などに着目し、伝記的・社会的背景を踏まえつつテキスト上に表現される老いを考察する。エイジズムや老いへの態度を検証し、Rich 作品を age studies の枠組みで研究することの可能性を広げていきたい。

### <文学部門:シンポジウム>

#### アメリカ文学と病

司会・講師	札幌市立大学	松井美穂
講師	北海道医療大学	鎌田禎子
講師	東京大学	藤井光

病とは、常に人間存在とは切り離せないものであり、文学においても多様に表象されてきたのはいうまでもない。しかしそれは単に病をめぐる現実を描いてきただけでなく、様々な病のイメージを作り出してもきた。そのイメージを分析することは、サンダー・L・ギルマンなどが示したように、我々と社会の関係のあり様をも明らかにする。また、病が「健康」、「日常」、「正常」といった概念の対立項としてみなされるのであれば、病は「他者性」を帯びることとなり、人と病の関係を問うことは、「他者」との関係を問うことともなるであろう。このシンポジウムでは、19 世紀から現代までのアメリカ文学作品、具体的には、エドガー・アラン・ポー、カーソン・マッカーズ、リン・マー、ナナ・クワメ・アジェイ＝ブレニヤーの作品における病の表象を、その時代や、公民権運動、グローバリズムなどの社会的背景も視野に入れながら分析する。そしてアメリカ社会と病と人間との関係を照らし出し、考察するのが目的である。

“God help the South.”—カーソン・マッカラーズの『針のない時計』における南部と病

松井 美穂(札幌市立大学)

『針のない時計』(*Clock Without Hands*, 1961)は、カーソン・マッカラーズ(1917-67)の最後の長編小説であるが、完成までに10年ほどを要している。その大きな理由は、若い頃より繰り返し病に襲われていた彼女の身体状況にあった。マッカラーズはこの小説のテーマをまず「生と死」の問題としている。小説は南部の薬剤師 J. T. マローンが白血病を宣告される場面から始まり、彼を通してそのテーマが展開される。しかしもう一つの大きなテーマとして50年代の南部の状況、つまり、ジム・クロー時代の終焉を目指す公民権運動の始まりと、それに対しなんとしても人種隔離を維持しようとするレイシズムとの激しい対立状況がある。小説の最後は、1954年5月の連邦最高裁が南部での公教育における人種隔離を違憲とした日である。「針のない時計」とは、死を宣告されたマローンの時間でもあり、登場人物の一人で白人至上主義者の判事クレインが抱く、旧南部こそ理想であるとするアナクロニスティックな時間感覚でもある。マッカラーズが、このような時間と病と南部を重ねることで何を描こうとしたのか改めて考えることが本発表の目的である。

“The mask of the plague”——ポーの作品において病が反転させるもの

鎌田 禎子(北海道医療大学)

2020年初頭から既に1年半以上、COVID-19は世界で猛威をふるい、21世紀の現代でも、疫病の前になす術なく、あらゆる影響を受け、翻弄される人間の姿を見せつけてきた。疫病のテーマを多く取り上げたポーも、この間さまざまに再読され論じられてきている。その中で、最も露骨に現実が想起させる恐怖と重なる「赤き死の仮面」(“The Masque of the Red Death,” 1842)についていま再考するなら、新たに浮かぶことはあるか。

同作品の初出のタイトルには“The Mask”の語が使われていた。「仮面」をつけた死装束の人物は、外界から逃れた舞踏会の只中に現れ、直ちに病を広げ、全てに死をもたらす。病とは健康な個体を襲う他者だが、疫病を得た者は、他者に病を伝染させて自己の一部とし、他者性を無にしようとする個体へと変貌する。コロナ禍でマスクを拒否した傲岸な為政者の様子はある種王プロスペローを思わせるが、その立場は簡単に反転し得るものだ。しかし、ポーの描く病者は、他者の先に再び自己へと向かう。ポー作品に頻出する他のテーマにも触れつつ、病の示し得るものについて考察したい。

2010年代のアメリカ小説における「病」の感染性

藤井 光(東京大学)

現代小説において、パンデミックは陳腐な仕掛けであると言っていい。2010年代の災害文学においては、

伝染病の大規模な流行は、気候変動と並んで物語のドラマを際立たせる要素としてしばしば利用されている。

なかでも注目すべきは、伝染病と経済との結びつきを明確に描く作家たちの登場であろうと思われる。アフリカ系作家ナナ・クワメ・アジェイ＝ブレニヤーの短編集『フライデー・ブラック』(*Friday Black*, 2018)の表題作、中国出身の作家リン・マーの長編小説『断絶』(*Severance*, 2018)はともに、他者との関係を作り出し、あるいは変容させる経済と病とのあいだに近接性を見出した感染小説を提示している。

必然的に、各小説においては、共同性や個人の過去のもつ意味が変化させられ、それがエスニシティや人種にもとづくアイデンティティの描かれ方にも波及している。目下のコロナ禍から生まれつつある小説を参照しつつ、21世紀の「病」と小説の関係を考察したい。

### < 語学部門: 研究発表 >

使用依拠的第二言語習得における個人の言語発達プロセスの考察

—メタ言語としての母語の果たす機能に着目して

泉 瞳(北海道大学大学院)

近年、認知言語学の使用依拠モデルは母語習得研究に応用され、その成果は第二言語習得研究にも影響を与えている。本研究では使用依拠的指導法による英語習得の過程を、個人に焦点を当てて観察し、収集した発話データを2つの観点から分析する。第一は文法習得に至るまでの言語表現の変化である。特定の言語表現を異なる形に変化させて繰り返し使用することにより、表現のスキーマが抽出され、それに基づく発話や作文が可能となるという仮説のもと、産出される表現の変化を分析する。第二はメタ言語としての日本語の使用である。指導において日本語を意識的に使用することにより対応する英語表現が明確化され、効率的な習得が行われるとの仮説を立て、検証を試みる。

Unaccusative Verbs with Two Arguments in Mandarin Chinese

高 叶琳(北海道大学大学院)

Unaccusative verbs usually take only one argument (Permutter 1978). However, there is a type of unaccusative verb that can take two arguments in Chinese.

Two representative explanations of this phenomenon are the Possessor Raising analysis (e.g., Xu 1999) and the Base Generation analysis (e.g., Pan & Han 2005).

However, there are problems need to be solved in these two analyses: the case of the NP at the object position in the Possessor Raising analysis and the theta-role of the NP at the

subject position in the Base generation analysis.

This study would like to propose the adoption of the scattered Deletion analysis to solve these two problems.

### <語学部門:セミナー>

日本語と英語の語の意味拡張のメカニズム

濱田 英人(札幌大学)

語の意味拡張は、それが生起する構文や談話といった言語使用の場の中で新しい意味を獲得することによって生じるが、その根源的基盤をなすのは言語話者の一定の認知能力の活性化と事態解釈の在り様である。本セミナーでは、日本語話者の場合には知覚と認識が融合した認知の仕方が慣習化しており、見えのままを言語化するので、知覚上の類似性や知覚体験からの連想により意味拡張が起こるのに対して、英語話者は発話開始時に右脳を活性化する(月本(2008))ことから、知覚情報を抽象化して捉えることができるため、より高次のスキーマによる意味拡張が可能であることを述べる。

このことを踏まえ、名詞の動詞化について考察し、日本語では名詞を動詞化する際に「する」を付加するのに対して、英語では語形変化することなく名詞から動詞へ品詞転換できるのは、両言語話者の知覚と認識が融合した認知とその分離という事態認識の違いに起因することを主張する。

### <語学部門:シンポジウム>

不定語研究の展開と展望

司会	北海道大学	奥	聡
講師	明治学院大学	平岩	健
講師	お茶の水女子大学	中西	公子
講師	東京大学	渡辺	明
講師	神戸大学	澤田	治

「何」「誰」「どの」などの不定語(indeterminate)は、特定の接語(particle)との共起が必要であるといわれてきた(Kuroda 1965)。これは一語で同様の機能が果たせる英語の what, who, every などと対照的である。

- (1) a. [太郎が何を食べた \*(か)]教えて

- b. Tell me [what John ate].
- (2) a. どの学生 \*(も) 遅れてきたよ
- b. Every student came late.

本シンポジウムでは、日本語の不定語に関わる最近の研究を検討し、今後の展望について議論することを目的とする。平岩・中西論文は、比較の「～より」によって認可される裸不定語を取り上げる。渡辺論文は「百何台かの車が事故に巻き込まれた」といった不定複合数詞について論じる。澤田論文は、感情表出性を持つ不定表現について考察する。

フロアからの質問・コメントも含め、活発な議論ができることを期待したい。

#### 比較節における裸不定語と自由選択表現

平岩 健 (明治学院大学)

中西 公子(お茶の水女子大学)

不定語は、「か」や「(で)も」と共起することで異なる解釈を得るが、「より」を伴う比較節においては、「太郎は誰より(も)賢い」のように裸で生じることが可能である。Hiraiwa and Nakanishi (2020)では、自由選択表現「誰でも」が、「誰だって、誰にしろ」などの無条件節を基底構造として持ち、「か」や「(で)も」と共起しない裸不定語となり得ることを論じた。本発表では、比較節に生起する裸不定語とは何であるのかを考察対象とする。まず、「より」節は否定極性表現を認可する環境ではないことを示し、次に、「ほとんど」による修飾の可否などに基づき、この裸不定語は全称量化詞ではないことを論じる。最後に、残る可能性として、自由選択表現であるという可能性を検証し、これが正しいことを主張する。

#### 不定複合数詞

渡辺 明(東京大学)

本発表では、不定の「何」を含む数詞の性格を、英語の不定複合数詞との比較のよって明らかにしていく。鍵となるのは、Hurford 1975 以来取り立てて進展の見られていなかった不定複合数詞一般に課せられる制約についての新たな提案と、個別の基数名詞が取りうる乗数についての更なる限定の認識である。複合数詞に「何」が含まれる場合もこれらの条件を満たしていると考えられる根拠を不定の部分が許容する解釈の面から探る。こうしたことから浮かび上がってくるのはデジタル数詞という概念の重要性であり、これは単純数詞ということから区別されなければならない。複合数詞の一部として用いられる「何」もデジタル数詞とみなすべきである、というのが分析結果である。これに対応するものは英語には存在しない。その原因として、日本語のような不定語のシステムを英語が欠いていることが考えられるが、その妥当性の検証は今後の課

題となる。

### 感情表出性を持つ不定表現の意味・機能

澤田 治(神戸大学)

(1)に見られるように、不定語を使った日英語の感嘆文は、通常、当該の程度が極端であるという話者の驚きを表す (Zanuttini and Portner 2003; Rett 2008; Castroviejo 2008, 2021)。

- (1) a. 何て大きな家だ。
- b. What delicious desserts John bakes!

しかしながら、(2)に見られるように、不定語を伴った文には、話者の不満を表すものもある。(2)は通常の疑問文としても解釈可能である。)

- (2) a. 何やってるの!
- b. What are you doing?

本発表では、感情表出性を有する様々な不定表現の意味・機能について通言語的な観点から考察し、wh 表現を基盤に作られる感情表出文 (感嘆文) の発話内的力を引き出すオペレータには、程度性が内在したオペレータと程度性が内在しない (聞き手に対する態度に関する) オペレータの2つのタイプが存在することを示す。